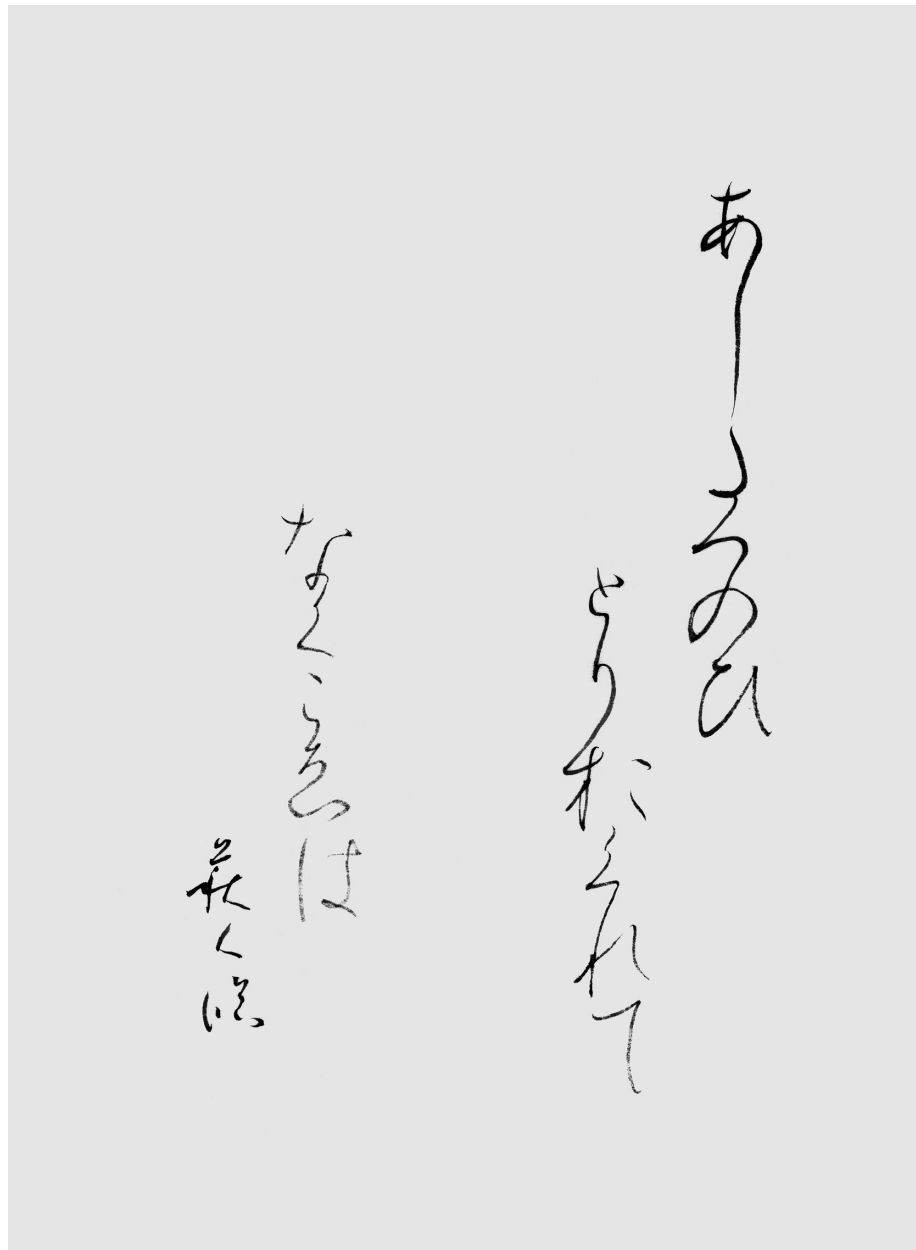
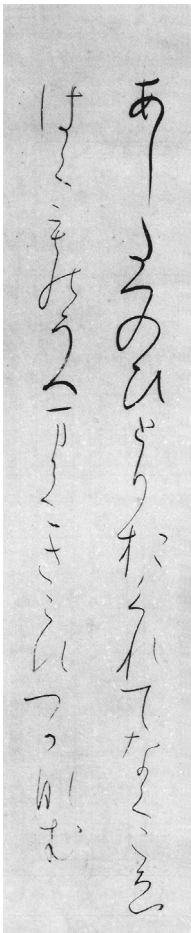


高・大・一般 (仮名有級・準初段まで)

辻 眞智子



〔釈文〕あしたつ^多のひとり^於おくれてなくこゑは(くものうへまできこえつがなむ)(高野切第三種)
 〔歌意〕一羽だけ群から遅れて鳴いている鶴の声は、(雲の上まで届いてほしいものよ。私も官位が遅れ
 ているので、雲の上の帝まで聞こえるように届いてほしいものよ。)



今月の課題では『古今和歌集』(998) 大江千里の歌から上の句十五文字で散らし書きを学びます。今回はA群が二行、B群が一行に加えて落款という紙面構成になります。

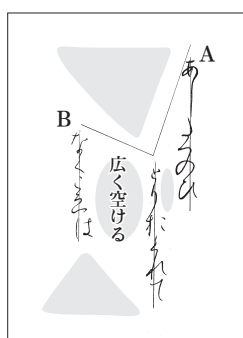
大江千里の生きた時代は宇多・醍醐天皇の頃(九世紀末〜十世紀初頭)で紫式部や清少納言より百年ほど前になります。中国文化の影響を脱け出して日本古来の文化が見直され、漢詩文と和歌が歩み寄り始めた時代です。漢学者で歌詠みであった千里の一族は、鍾々たる逸材を輩出しました。また、在原業平は千里の叔父にあたります。

今月の学び

・各連綿の中心移動に留意して行脈を通す。
 (1) 連綿する文字の中心はほぼ動かない。

(2) 最後の一文字の中心が右へ移動する。

・散らし書きを学ぶ。



(1) A群(二行)とB群(一行)の二群で構成する。

(2) A群とB群の間の余白は広くとる。

(3) 行頭の高さに変化をつける。

(4) 一行目「し」と「多」、二行目「於」と「く」の位置関係に留意し行脈を通す。

(5) 墨継ぎは、三行目行頭「な」でしてもよい(範例は墨継ぎなし)。

(6) 落款は「〇〇臨」とする。

高・大・一般 漢字

新(10)級から五段までは作品用紙として画仙紙ハツ切り(68 cm×17.5 cm)又は、画仙紙半切(136 cm×35 cm)のみの出品です。
六段から八段までは作品用紙として従来通り画仙紙半切(136 cm×35 cm)のみの出品です。

石坂 雅彦

蒼嶂秋雲更白 青林霜葉偏紅

丙午秋雅彦

〈釈文〉蒼嶂秋雲更白 青林霜葉偏紅

〈読み〉蒼嶂そうしょうの秋雲あきぐも更に白く、青林せいりんの霜葉しもは偏ひと

へに紅なり。

〈大意〉山々の雲、山間の紅葉を絵画的に捉え、

大自然の秋の風情の美しさを表わしている。

〈出典〉吳師道詩

〈撰文〉近年の地球温暖化で季節感の狂いを感じるこの頃、ふと目に留まった詩句に絵画を見

るような秋の美しさに惹かれ、この詩句を書くことにした。

〈目的〉篆書で二行が先行し、撰文の結果小

篆を選択した。小篆にも色々あるが、近代篆書の祖といわれる鄧石如を漠然とイメージし、古

臭くならず、壊し過ぎず、現代性を出せるように考えた。

〈字調べ〉北川博邦編『清人篆隸字彙』(雄山閣)を使って調べた。鄧石如の字例が無い字は、

同時代で近いところに鄧石如の影響を強く受けたという吳熙載や趙之謙がいる。その字例を参考にした。

〈表現〉鄧石如風の長脚篆を字頭を揃え、

余り大小をつけずにまとめるようにした。余白の効果でスッキリとした秋らしさを意識して書

き進めたが、弱くならないように鄧石如の線質

が持つ重量感や強さ変化を忘れないようにした。墨継ぎは余り意識せず自然の流れで書いてみた。

篆書の基本は大事なのですが、それに拘り

過ぎると伸びやかに筆が動かない。また、鄧石如の模写や臨書ではない点を考え、イメージを

大切にしながら自由に筆を運んでもらいたい。できることなら作品制作前に鄧石如の篆書をよく見るか習うかして、イメージを確かなものにして取り組んでもらいたい。

〈落款〉七字五字の配置により落款部にチョツ

と広い空間ができたので、干支(丙午)による年号と季節(秋)を入れて一行に書いてみた。